アスペクト・プロジェクト研究会　　２００７年1月１７日（水）発表

テーマ：「聖書各国語訳の比較にみるアスペクト」

水戸博之

テキスト：マタイ福音書各国語版
研究方法：２古典語（ギリシア語・ラテン語）とスペイン語・ポルトガル語を中心
　とした近代語訳とを比較し、構文的異同を検討する。
前提：ギリシア語版とラテン語版二つを「原典」とする。
前提の問題点：
１）現実にはギリシア語原典も様々な文献批判を通じた校訂作業の上に成立している。
２）聖典と翻訳の多様性。

各言語の文法的特性と対応関係：
分詞構文
ギリシア語：genetivus absolutus　（属格別句）
ラテン語：　ablativus absolutus　（奪格別句）
スペイン語・ポルトガル語：現在分詞（gerundio　/ gerúndio　副詞的）構文；
（過去）分詞構文；
様々な副詞節（句）

動詞から派生した語形：分詞・不定詞（不定法）
ギリシア語：
形容詞的：
現在分詞・アオリスト分詞・現在完了分詞（能動相；中動相・受動相）・未来完了分詞受動相
不定詞（現在・未来・アオリスト・現在完了・未来完了）
ラテン語：
形容詞的
（能動）現在分詞・（受動）完了分詞・未来分詞・supinum・gerundivum
動名詞（有格変化・主格なし）gerundium
不定詞（現在・完了・未来・能動相・受動相）
スペイン語・ポルトガル語：
　形容詞的：（過去）分詞
　副詞的：　現在分詞（gerundio　/ gerúndio）：再帰代名詞を伴う場合人称標示

可
　名詞的：　　不定詞：ポルトガル語において語形的に人称不定詞有

時制の対応関係：
　問題：以下の縦の系は同値であるか、どの程度対応するのか。
ギリシア語：　現在―アオリスト
ラテン語：　　現在―完了
スペイン語：　現在―不定過去（pretérito indefinido）
ポルトガル語：現在―完全過去 (pretérito perfeito)

＊マタイ福音書第１章の考察

主に使用する版（上から記載順。3 言語版は希羅西の順。）
José María Bover y José O´Callaghan, *Nuevo Testamento Trilingüe*, Madrid, 1977 : スペイン語訳は対訳であるとともに保守的文体。接続法未来の使用。
（引用では一行あけ。）
Sociedades Bíblicas Unidas, *La Bíblia de estúdio*, Madrid, 2002：スペイン語共同訳。
Sociedade Bíblicas de Portugal, *Bíblia Sagrada em Português corrente*, Lisboa, 1993：ポルトガル語共同訳、現代ポルトガルのポルトガル語。
日本語訳は新共同訳、14 ポイントで引用。（　　）日本語は発表者の逐語的試訳。

その他、発表においては、英語版２種、独仏露中、各言語の訳を随時参照した。
参照した版は以下の通りである。
The Bible Authorized King James Version with Apocrypha, Oxford World's Classics, 1997.
Good News New Testament-Today's English Version (ed.2), American Bible Society, 1966.
Die Bibel, Herder, 1965.
Le Nouveau Testament (trad. Osty et Trinquet), Éditions Siloé, 1972.
БИБЛИЯ, Издание Московской Патриархии, 1976.
『聖經』，香港聯合聖經公會, 1961.

A)　翻訳の多様性の一例：マタイ福音書の冒頭・イエスの系図 ,1-16

　マタイ福音書はイエスの系図で始まる。少なからぬ人が、はじめて聖書を手にしたとき、人名の羅列に困惑あるいは辟易した経験を持ったのではないか。実は発表者も同様な経験を持つと同時に、アスペクト研究にこの第１章の部分は無関係であろうと当初は考えていた。ところが、スペイン語とポルトガル語における接続法未来の用法比較を研究していた際、複数の版、異言語間のみならず同一言語の版の間にも意外な差異があることに偶然気がついた。無論、いずれも聖典の権威ある翻訳である。

主要な問題点を一言で要約するならば、「父が子を『生んだ』」の『生む』という表現の現代社会における妥当性あるいは是非である。第 **2** 節の引用で示すように、新共同訳では『もうける』という訳を使用している。一般にこの種の問題は、ジェンダー論で論じられる事柄であろうが、言語学的視点から広義のアスペクト論と捉えられないことはない。また、聖書学の分野においてあまり注意が払われていない問題でもあるようなので、諸版の間の言語的異同についていくつか考察してみたい。

1,1 βίβλος γενέσεως **Ihsou** Χριστο**u** υ**i**ο**u** Δαυιδ**,** υ**i**ο**u** Αβραάμ**.**

Liber generationis Iesu Christi filii David, filii Abraham.

Libro de la generación de Jesucristo, hijo de David, hijo de Abrahán.

La lista de los antepasados de Jesucristo, descendiente de David y de Abraham:

（ダビデとアブラハムの後裔、イエス･キリストの祖先たちの系図）

Estes são os antepassados de Jesus Cristo, descendente de David e de Abraão:

（これらは･･･イエス･キリストの祖先たちである、･･･。）

アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。

3 言語対訳は、冒頭の語はいずれも「書」を意味するが、それに続く γένεσις, generatio, la generación からは、それぞれ受ける印象が異なる。他言語の例を示す。欽定訳：The book of the generation of Jesus Christ; 独： Buch der Abstammung Jesu Christi; 仏：Généalogie de Jésus Christi; 中：**耶蘇基督的家譜**。

スペイン語共同訳が「祖先の『リスト』」としている一方で、ポルトガル語共同訳は「系図」という表現をせずに、「これら（の人々）は」としている。ちなみに平易な現代英語訳では、This is the list of the ancestors of Jesus Christ となっている。

人名に関して、スペイン語とポルトガル語ばかりでなく、原典であるギリシア語やラテン語も必ずしも格の語形変化を完全に行っていない一方で、ロシア語は全て格変化をしている。特に注目すべきは、２古典語においても見かけ上無変化であるダビデとアブラハムの語形である。

Родословие Иисуса Христа, Сына Давидова, Сына Авраамова.

冒頭の語「系図」を除いて、すべて単数生格形である。仮に単なる単数生格「ダビデの」「アブラハムの」であれば*Давид-а, *Авраам-а となるはずであるが、-ов-а（氏・後裔-の）と語尾-ов が付加された姓を表す語形または氏族への所属を表す形容詞形の生格となっている。一方、西葡共同訳では descendiente / descendente（後裔・単数）は１語で、「ダビデの、そしてアブラハムの」と説明が続く。

このように、第１章第１節からかなりの異同が見出される。

第２節から第 16 節のイエス・キリストまで同様な表現が反復される。

1,2 Αβρα**αμ** **e**γέννησεν τ**o**ν Ισαάκ**,** Ισαακ δ**e** **e**γέννησεν τ**o**ν Ιακώβ**,**
Ιακώβ δ**e** εγέννησεν τ**o**ν Ιούδαν κα**i** τo**u**ς **a**δελφo**u**ς α**u**τo**u, 3** Ιούδα"
δ**e** εγέννησεν τ**o**ν Φαρ**e**ς κα**i** τ**o**ν Ζαρα **e**κ τ**h**ς Θά**μ**αρ**,**
Abraham genuit Isaac, Isaac autem genuit Iacob, Iacob autem genuit Iudam et frateres eius. 3 Iudas autem genuit Phares et Zara de Thamar,
Abrahán engendró a Isaac, Isaac engendró a Jacob, Jacob engendro a Judá y a sus hermanos. 3 Judá engendró a Farés y a Zará de Tamar,
（アブラハムはイサクをもうけ、･･･、３　ユダはベレツとゼラをタマルからもうけ、･･･）

Abraham fue padre de Isaac, este lo fue de Jacob y este de Judá y sus hermanos. 3 Judá y Tamar fueron los padres de Fares y Zérah.
（アブラハムはイサクの父であって、これ[アブラハム]はヤコブのそれ[父]であって、これ[ヤコブ]はユダとその兄弟達の[父であった]。３ユダとタマルはベレツとゼラの両親であった。）
Abraão, Isaac, Jacob, pai de Judá e seus irmãos, 3 Peres, irmão de Zera --- **a mãe** foi Tamar, ...
（アブラハム、イサク、ヤコブ（すなわち）ユダとその兄弟たちの父、３ベレツ（すなわち）ゼラの兄弟･･･**母は**タマルであって･･･）

アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、３ユダはタマルによってベレツとゼラを、･･･

「［父］は［子］をもうけ、･･･」は、３言語対訳では、εγέννησεν **(gennaw)**； genuit (gigno); engendrar である。他の言語で対応する語は、beget; zeugen; engendrer; родить そして中国語では「**生**」である。西葡共同訳では、いずれも構文を換えて、「父であった」としている。

保守的文体のポルトガル語訳では gerar を用いている。ただし、辞書の文例によると必ずしも主語に性別の限定はないようである。Abraão gerou a Isaque; Isaque, a Jacó; …(trad. João Ferreira de Almeida, 1993); Eva gerou Caim. エヴァはカインを産んだ。（白水社、『現代ポルトガル語辞典』1996）なお、このポルトガル語訳においては、スペイン語のように特定の人物が直接目的語であることを示す前置詞の a が用いられている。現代ポルトガル語では、比較的稀な用法と言えるであろう。

ここで、今ひとつ注意すべきことは、スペイン語共同訳の「両親」、そしてポルトガル語共同訳の「母」という語が古典語原典においては見出されないということである。加えて、ポルトガル語共同訳は、単に名前を羅列しているかの印象すら与える。仮にタマルが女性名であることを知らずに「母」と訳す文法的根拠を求めるとするならば、ギリシア語原典の **e**κ τ**h**ς Θά**μ**αρ（タマルから）の定冠詞 τ**h**ς

が女性単数属格形であることによる。

次の第６節も古典語において代名詞としてのみ記された女性が、近代語訳において「妻」や「母」と訳出される例である。

1,6 … Δαυ**i**δ δ**e** εγέννησεν τ**o**ν Σολομ**w**να **e**κ τ**h**ς τ**o**υ Ο**u**ρίου,
（そしてダビデはウリヤの[女]からソロモンをもうけた）
David autem genuit Salomonem ex ea quae fuit Uriae,
（・・・ウリヤの[妻]であった[女]から）
…David engendró a Salomón de la que fue mujer de Irías.
（・・・ウリヤの妻であった[女]から）

…, y el rey David fue padre de Salomón, cuya madre fue la que había sido esposa de Urías.
（そして王ダビデはソロモンの父であった。その母はウリヤの妻で［かつて］あった女であ
った。）
…, o rei David, 7 Salomão --- a mãe tinha sido mulher de Urias, …
（王ダビデ、７ソロモン･･･母はウリヤの妻で［かつて］あって、）

ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、（７ソロモンはレハブアムを）

ヴルガタ訳からスペイン語共同訳まで関係文を用いている。3 言語対訳のスペイン語が mujer（妻）と訳出しているのは、さすがに関係代名詞の定冠詞 la que のみで表現することに無理があったからであろうか。ギリシア語のアオリストは、ヴルガタにおいて完了、スペイン語２訳において不定過去に対応している。２共同訳で［かつて］と補ったのは、過去完了または大過去であることによる。
系図の最後１６節イエスの誕生に至って、「もうけた」とともに「生まれた」が表れるものの、「母が産む」ではない。

1,16 Ιακ**w**β δ**e** εγέννησεν τ**o**ν Ιωσ**h**φ τ**o**ν **a**νδρα Μαρίας**,** **e**ξ **h**ς **e**γεννήθη Ιησο**u**ς **o** λεγόμενος Χριστός**.**
（･･･ヤコブはヨセフ、マリアの夫をもうけた。彼女からイエス、キリストと呼ばれ[てい]る者、が生まれた。）
Iacob autem genuit Ioseph virum Mariae, de qua natus est Jesus qui vocatur Christus.
（彼女からキリストと呼ばれるイエスが生まれた。）
Jacob engendró a José, el esposo de María, de la cual nació Jesús, que es llamado Cristo.

（彼女からイエスが生まれ、キリストと呼ばれる。）

Jacob fue padre de José, el marido de María, y ella fue la madre de Jesús, a quien llamamos el Mesías.
（ヤコブは、マリアの夫ヨセフの父であって、彼女はイエスの母であって、彼を私達はメシアと呼ぶ。）
Jacob, José, casado com Maria, da qual nasceu Jesus, o Messias.
（ヤコブ、ヨセフ（彼は）マリアと結婚、彼女からイエス、（すなわち）メシアが生まれた。）

ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。

ギリシア語の「生まれた」は語形的には「生んだ」の受動形である。ヴルガタ natus est は変位動詞 nascor の完了形で意味は自動詞的ある。西葡 nacer / nascer は自動詞である。2 共同訳の相違は興味深い。スペイン語が父子、母子の関係として訳出しているのに対し、ポルトガル語は、列挙された人物の関係を時系列的に記述している。他方、２共同訳の共通点として、各テキスト末尾の Χριστός が「メシア」と訳出されていることが注意を引く。

ギリシア語の **ο** λεγόμενος（キリストと呼ばれ[てい]る者：定冠詞＋現在中・受動相分詞男性単数主格）の扱いに、いずれの訳も留意し個性を発揮している。３対訳版の羅西は関係文の現在受動形あるいは受動態であるのに対し、共同訳のスペイン語は関係文でしかも現在一人称複数を用い、ポルトガル語は冠詞を伴い称号のごとく Jesus に続く。

第１７節でアブラハムからイエスまでの世代数（１４代が３段階）が示され、次
にイエス・キリスト誕生の経緯が語られる。

B）第１章１８節以下　分詞構文および関係節の比較対照

１８節から２５節は、３言語対訳、西葡共同訳、新共同訳を中心に分析を行う。

1,18 Τo**u** δ**e** Ιησο**u** Χριστο**u** **h** γένεσις ο**u**τως ἦν. **Μνηστευθείσης τhς μητρο**ς **αu**τo**u Μαρίας τw Ιωσήφ,** *πρ**i**ν ἢ συνελθε**i**ν α**u**τo**u**ς* ε**u**ρέθη **e**ν γαστρ**i** **e**χουσα **e**κ Πνεύματος Αγίου.
（聖霊から身ごもっている彼女が見出された）
属格別句アオリスト受 *前置詞不定詞句アオリスト主語対格*　アオリスト受＋現在分詞（状態）
Iesu Christi autem generatio sic erat. **Cum esset desponsata mater eius**

Maria Ioseph, *antequam convenirent* inventa est in utero habens de Spiritu Sancto.
（彼女は聖霊から身ごもっていて見出された）
副詞節（譲歩）接続法過去完了？*副詞節（前時）接続法未完了*　完了受＋現在分詞（状態）
La generación de Cristo fue así: **Desposada su madre María con José,** *antes de que cohabitasen* se halló que había concebido, (lo cual fue) por obra del Espíritu Santo.
（［彼女（自分）は］［すでに］身ごもったものであると［彼女は？］分かった。（これは）聖霊の業による（ものであった））
過去分詞構文女単　*副詞節（前時）接続法未完了過去*　不定過去・再帰的＋名詞節（直・過去完了）

El nacimiento de Jesucrito fue así: **María, su madre, estaba comprometida para casarse con José**; pero antes de vivir juntos se encontró encinta por el poder del Espíritu Santo.
(ヨセフと結婚するよう約束していた；しかし［彼らが］一緒に暮らす前に**)**
未完了（状態・過去分詞［形容詞］）*前置詞不定詞句*　不定過去・再帰的＋形容詞（状態）
Quanto a Jesus Cristo, a sua origem foi assim: **Maria, sua mãe, tinha o casamento tratado com José;** mas, *antes de se casarem*, achou-se grávida pelo poder do Espírito Santo.
(ヨセフと約束した結婚を所有していた：結婚をヨセフと［すでに］約束していた；しかし彼らが結婚する前に**)**
未完了＋目的語・過去分詞　*前置詞人称不定詞句*　完全過去＋形容詞（状態）

イエス･キリストの誕生の次第は次のようであった。**母マリアはヨセフと婚約していたが、***二人が一緒になる前に*、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。

まず「次のようであった。」の動詞について、２古典語が未完了形 ἦν; erat であるのに対し、西葡訳が３対訳のスペイン語も含め、fue; foi と不定過去あるいは完全過去形となっている。時制が異なるのは、古典語と近代語の差異によるものであろうか。仮に近代語で語形的に対応する未完了形をあてはめるならば、era となるはずである。

次の太字の部分は、ギリシア語原典の分詞構文が他言語において、いかに訳出されているかが検討課題である。ギリシア語の構文を「属格別句」と書いたが、これは正確ではない。なぜなら、本来の意味での絶対用法であるならば、母マリアは、主文の主語と同一であってはならないからである。この点、ラテン語は、絶対用法の「奪格別句」を避けて、Cum+接続法の副詞節を用いている。この副詞節について疑問符を付したが、二つ問題を指摘できる。２共同訳の続きの節が通常逆接に訳される接続詞から始まることから、この副詞節の性質を譲歩としたが、

理由や単に時を示すと考えることも可能である。また時制についても過去完了と古典あるいは学校文法の語形分類に従ったが、ヴルガタの esse＋過去分詞の複合形の時制においては、西葡２共同訳に見るように、助動詞 esset（接続法未完了）の時制で考えるべきかもしれない。

この箇所の西葡３訳の異同は興味深い。３対訳スペイン語は、過去分詞の分詞構文で、上述のように本来的ではないが、ギリシア語の属格別句に一番近いといえよう。その一方で、主文 se halló que 主語が María であるのか否か迷いを覚える。なぜならば、スペイン語において、知覚または思惟の主節動詞の主語と知覚・思惟の内容を示す que 名詞節の動詞の主語が同一である場合が多い一方で、主節の動詞が３人称単数の再帰用法の場合、que 以下を導くのみの一種の無人称的構文という説明も可能だからである。後者は、英語の It …that 構文が対応する例といえる。

２共同訳は、副詞節ではなくセミコロンで区切られる前の第一の主文としている。ここで、狭義のアスペクトが問題になる。すなわち、いずれも基本的には、(助)動詞（未完了）＋補語の構造でといえる。スペイン語は助動詞 estar＋形容詞的補語により過去の状況を表現しているのに対し、ポルトガル語は、所有の ter＋目的語＋目的語に性数一致の過去分詞の構造をとっている。問題は、時制に関して二つの訳が同値であるかということである。日本語へなかなかうまく訳出できないが、複合時制で目的語に分詞が性数一致する完了も存在し、tinha …tratado と考えれば一種の過去完了であり先行性または前時性も表現していると考えられる。

次のギリシア語の不定詞句は、対訳羅西は前時の副詞節、２共同訳は前時の前置詞句に訳出されている。ところで、西葡訳は、同じ前置詞句を用いながらも、３対訳と日本語新共同訳に対し独自の訳語を選択している。さらに西葡訳の不定詞が如何に人称を反映しているかも興味深い対比が見出される。私訳では［彼らが］を両者に加えた。ポルトガル語は語形として人称不定詞が存在しさらに再帰代名詞を伴った形で se casarem となっている。-em が３人称複数を示す語尾である。一方、スペイン語では、再帰動詞の場合、再帰代名詞の部分を動詞の変化と見なすか否かの問題があるが、少なくとも不定詞の動詞的部分本体については明示的な指標や変化は現れない。ところで、この箇所の vivir は再帰代名詞を伴っておらず、「一緒に」と副詞的に訳された形容詞 juntos が男性複数形をとり、不定詞句の主語も男性複数であることを示している。

最後の新共同訳で「母マリアは、･･･身ごもっていることが明らかになった。」の「･･･こと」を名詞節との対応と仮に考えることができるとすれば、これに構文的に一番近い訳は、３対訳のスペイン語である。構文を反映した日本語は困難であるものの、３対訳スペイン語の独自性は多少なりとも明らかにできるであろうか。また２古典語が主文に対し同時的かつ持続的な現在分詞を使用している一方で、スペイン語訳は過去完了を使用していることも注意を引く。さらに丸括弧で言葉を補い、「聖霊の業」を説明的に訳出していることも特異な点である。他方、ギリシア語とラテン語の相違点に目を向けるならば、マリアを示す女性単数主格

形が、ギリシア語では現在分詞 **e**χουσα であるのに対し、ラテン語では、対応する現在分詞 habens が３性同じ語形であるものの、主文の動詞の受動完了形 inventa est によって示される。なお、この複合動詞の助動詞的第二要素 est は古典文法のとおり現在形であり、ギリシア語アオリスト―ラテン語完了の図式対応は守られている。

西葡２共同訳は形容詞によって女性単数が示されている。動詞部分の単語はことなるがいずれも「見出す」を意味し、再帰用法で「見出される」、さらに形容詞などを伴い状態を表す助動詞的機能を持つ。両者とも不定（完全）過去形である。以上のことから、この箇所については、４言語間のアオリスト―完了―不定（完全）過去の対応が成立することが検証された。ところで、スペイン語の訳語に embarazada を使用しなかったのは語感がよくないせいであろうか。

第１９節ではギリシア語における主語を説明する主格の分詞が、他言語においていかに表現されるかを中心に考察する。

19 Ιωσ**h**φ δ**e o a**ν**h**ρ α**u**τ**h**ς, **δίκαιος w**ν **κα**ι **μh θέλων α**υ**τh**ν **δειγματίσαι**, **e**βουλήθη λάθρ**a a**πολ**u**σαι α**u**τήν. （正しい人であり･･･望まない[ヨセフは]）

形容詞＋現在分詞・主格；μη 現在分詞（願望）＋アオリスト不定詞 アオリスト受（願望）＋アオリスト不定詞

Ioseph autem vir eius, **cum esset iustus et nollet eam traducere,** voluit occulte dimittere eam.

副詞節（理由）接続法未完了 完了（願望）＋不定詞能

José, su marido, **como fuese justo y no quisiese infamarla,** resolvió repudiarla secretamente.

（正しい人であり彼女に汚名をきせるのを望まなかったので、密かに彼女を離縁することにした。）

副詞節（理由）接続法未完了 不定過去＋不定詞

José, su esposo, **que era un hombre justo y no quería denunciar públicamente a María**, decidió separarse de ella en secreto.

（正しい人でありマリアを公に非難することを望んでいなかった[ヨセフは]密かに彼女と別れることを決心した。）

形容詞節（説明的） 不定過去＋不定詞

José, seu noivo, homem justo, não a queria acusar publicamente. Por isso pensou deixá-la sem dizer nada.

（ヨセフ、彼女の夫、正しい人は、彼女を公に非難したくなかった。それゆえ、何も言わずに彼女と別れようと考えた。）

形容詞，未完了＋不定詞 完全過去＋不定詞

夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。

ギリシア語原典においては、２つの現在分詞がヨセフを説明している。３対訳の羅西において、これら２つの現在分詞は、一つの理由節の中で接続法未完了形の２つの動詞に訳出されている。ここで注意したいことは、２つの動詞の意味が、前者は恒常的性質を表す繋辞である一方、後者は助動詞的用法で願望を表していることである。この二つを一つの節あるいは句の中に並列させることの文体論的問題については、西葡２共同訳が興味深い対照を示している。スペイン語が形容詞節の関係文説明的用法で訳出しているのに対し、ポルトガル語は、「ヨセフ、彼女の夫、正しき人は」と３つ目の要素として主語に並列させ、後半の「望んでいなかった。」を主文の動詞として独立させている。

２古典語の主文の動詞の時制はアオリスト・完了であり、西葡はすべて不定（完了）過去である。ここでも４言語間の対応は一貫しているといえる。なお、構文について二つに文を分離したポルトガル語訳は、por isso（それゆえ）を補い、帰結文のように訳出している。助動詞的用法の意思・願望の動詞の対応は、ギリシア語とラテン語ともにかなり広い語感を表しうるが、スペイン語２訳が決意や決断の強い意味で訳出しているのに対し、ポルトガル語は pensar+inf.と最も一般的な語法の一つ「･･･しようと思う」としている点が対照的である。またポルトガル語は、新共同訳で「縁を切る」に対応する動詞を、広義かつ多義の deixar を用いている。この葡語共同訳は、先の系図の部分と同様、婚姻関係に関する表現に格別の配慮をしているように思われる。

所有関係の語法に関しては、「彼女の」古典語が属格であるのに対し、西葡近代語はすべて所有形容詞で表現している。

第２０節は分詞構文に関し古典語と近代語との相違が顕著になる箇所である。

20 **ταυτα δε αυτου ενθυμηθέντος, i**δο**u** *αγγελος Κυρίου* κατ’ **o**ναρ *εφάνη αυτw λέγων* Ιωσ**h**φ υ**io**ς Δαυίδ, μ**h** φοβηθ**h**ς παραλαβε**i**ν Μαριαμ την γυναικά σου**:** <u>Το γαρ εν αυτη γεννηθέν</u> εκ Πνευματός <u>εστιν</u> ‘Αγίου.

（これらのことを、さて彼が考えたところ、見よ*主の使いが夢に現れ*［た］*彼に*［次のように］*言って*　ヨセフ、ダビデの子よ、恐れてはならない、マリアをお前の妻として受け入れることを。というのは、彼女の内に生まれたものは、聖霊から［のものだから］である。）

属格別句アオリスト受男 *第２アオリスト＋現在分詞* <u>アオリスト分詞受中性主格+直現在</u>

Haec autem eo cogitante, ecce *angelus Domini* in somnis *apparuit ei dicens*: Ioseph fili David, noli timere accipere Mariam coniugem tuam; <u>quod enim in ea natum est</u>, de Spiritu Sancito est.

（これらのことを、さて彼が考えていると、･･･。）

奪格別句現在分詞能男　*完了＋現在分詞*　名詞節（完了受）

Estando él en estos pensamientos, de pronto *un ángel del Señor se le apareció* en sueños *y le dijo*: José, hijo de David, no temas recibir en tu casa a María, tu mujer, pues lo que se engendró en ella es del Espíritu Santo.

（**これらの考えの中に彼がいると、***突然主の［１人の］天使が彼に夢の中で現れてそして彼に言った：*）

現在分詞構文主語　不定過去＋不定過去 名詞節（中性・不定過去再帰）＋直現在

Ya había pensado hacerlo así, *cuando un ángel del Señor se le apareció en sueños y le dijo:* “José, descendiente de David, no tengas miedo de tomar a María por esposa, porque el hijo que espera es obra del Espíritu Santo.

（[彼は]すでにそのことをその様にしようと考えてしまっていた、主の[一人の]天使が夢の中で彼に姿を現し彼に言ったとき：･･･なぜなら待っている息子は聖霊の業だからである。）

直過去完了　*副詞節（時・不定過去再帰＋不定過去）*理由節（名詞節・直現在＋直現在）

Andava ele a pensar nisto, *quando lhe apareceu num sonho um anjo de Deus e lhe disse:* “José, descendente de David, não tenhas medo de casar com Maria, pois o que nela se gerou foi pelo poder do Espírito Santo.

（彼はこのことを考えていた、･･･とき：･･･、というのは彼女の中で生まれた者は聖霊の力によるのであった。）

未完了過去（迂言的andar a inf.:進行形相当）*副詞節（時・完全過去＋完全過去）*名詞節（男性？・完全過去再帰）＋完全過去。

このように考えていると、*主の天使が夢に現れて言った*。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。

ギリシア語原典冒頭太字の部分は属格別句である。新共同訳には訳出されていないが、彼（ヨセフ）が主語である。主文の主語が天使であることから、第１８節と異なり、代名詞にややぎこちない印象があるものの、本来的意味での絶対用法である。ラテン語においては奪格別句に対応している。両者の相違点は、ギリシア語がアオリスト分詞で完結性を表現し得るのに対し、ラテン語は現在分詞であり主文との同時性および持続性を表現し得る点である。この差異は、後述するように、西葡２共同訳の相違に表れる。

分詞構文の近代語における対応は、３対訳のスペイン語までである。ただし estar の gerundio 形に代名詞の主語は、母語話者でない筆者が見てもやはり苦しい感じがする。また訳語 estos pensamientos（考え）が複数であるのは、古典語の目的語が中性複数対格であるためであろうか。西葡２共同訳は、この分詞構文の部分を

主文に転換しているが、過去時制である点以外は、スペイン語は過去完了、ポルトガル語は未完了過去の迂言的進行形、と大きな差異が生じている。また、pensar（思う・考える）が前者は助動詞的、後者は本動詞であることも興味深い対照である。これらの点で相違しながら、西葡２訳では、３対訳の主文が時の副詞節に転換している。

２古典語主文の部分において、さらに近代語では直接対応できない要素がいくつか見られる。**ἰδοu,** ecce（見よ）は近代語の mira; olha には対応しないのであろうか。３対訳のスペイン語 de pronto は、「突然」が第一義で、注意を喚起する意味に直接はならない。また古典語の分詞 λέγων; dicens （言って、言いながら）は、３対訳のスペイン語をはじめ他の西葡訳も分詞ではなく、人称変化動詞で表現している。

「夢に」の箇所、ギリシア語とポルトガル語が単数、ラテン語とスペイン語は複数で表現されている。ちなみに、スペイン語では「夢」と「眠り」は同一語であるが、ポルトガル語では「眠り」は sono と区別している。

天使の言葉は否定の命令で始まる。ギリシア語については、接続法アオリスト形で「恐れの故にためらってはならない」の意味とされる(Cf. Blass & Debrunner, *A Greek Grammar of the New Testament,* 1961: 336(3)) 。この第１９節はあまりに有名であるが、動詞 **foboumai** が否定の命令で不定詞句を伴う用例は稀なようである。「恐れるのをやめよ」という意味であれば、現在形であるべきという説もある（Cf. 岩隈『希和対訳』1989）。ラテン語は nolo（欲しない）の命令、西葡は接続法現在を用いた否定命令である。 なお、第１節と同様、西葡共同訳は、「子」を descendiente / descendente と訳出している。

「（おまえ）の妻（として）」の部分も各版特徴が見出される。所有関係の表現について、ギリシア語では２人称単数属格、ラテン語と３対訳スペイン語では２人称単数の所有形容詞を用いている。第１９節における３人称の所有関係のときは、２古典語はいずれも代名詞の単数属格で表現していたが、この２人称の箇所では、品詞が相違する。他方、西葡共同訳では所有関係の表現を避けているようである。すなわち、スペイン語は「妻として受け入れる」、ポルトガル語は「マリアと結婚する」と訳している。

「マリアの胎の子は･･･」の箇所は、各言語・訳の特徴が見出され興味深い。ギリシア語のみがアオリスト分詞中性に冠詞を付し名詞化している。その他、羅西葡はいずれも関係文である。ヴルガタ訳は、中性単数主格の関係代名詞 quod で導かれ、動詞は変位動詞(deponentia) nascor の完了受動形 natum est である。３対訳スペイン語は、se engendró ＜engendrarse（生まれた）: 第２節において訳語が問題になった engendró（生んだ ; もうけた）の再帰用法であり、時制は不定過去である。分詞から人称変化動詞への変化はあるものの、アオリスト―完了―不定過去の３言語間のアスペクトの対応が、ここでも見出されると言えよう。ただし、次に検討するように、スペイン語の不定過去が最適の時制であるか否かは問題である。

西葡２共同訳、特にスペイン語は、ギリシア語の名詞化したアオリスト分詞を、文法的対応をよりも、むしろ説明を優先して訳していると思われる。関係文 el hijo que espera の筆者の試訳が適切であるのか否か実は自身が持てない。動詞は esperar（待つ ; 期待する ; 希望する）の直説法現在３人称単数であることは確かである。主語が el hijo（子）であれば、自動詞的用法で、子が誕生の時を待っているという意味であろうか。子を目的語と捉える el hijo que (tú) esperas （お前が［誕生を］待っている子は）; el hijo que esperar（［誕生を］待つべき子は）ではない。また、es obra del Espíritu Santo（聖霊の業である）の obra が起源の前置詞 de で導かれず、しかも無冠詞であることが注意を引く。スペイン語の ser＋無冠詞名詞の用法は、例えば英語との比較で Yo soy × estudiante. / I am a student. において、「教師や会社員ではなくて学生である。」という場合、形容詞的に機能するといった説明がしばしばなされる。ちなみに先述の欽定訳では for that which is conceived in her is of the Holy Ghost.
なお、関係節が受動態で現在形である。他の言語も先に参照した版において（繋辞）＋（前置詞＋「聖霊」）の構文をとっている。

ポルトガル語訳もいくつか特徴を指摘できる。関係文 o que nela se gerou において、先に保守的文体の訳において使用されていた gerar が、スペイン語訳と同様に再帰代名詞を伴い自動詞的意味になる。問題は、先行詞に filho など普通名詞が置かれていない点である。冠詞も含めた関係代名詞 o que は、ギリシア語との対応でやはり中性と考えるべきであろうか。ポルトガル語の文法体系において、中性という範疇の位置づけは、語形的な区別が男性単数主格との区別がないこともあり、スペイン語における中性と比較し明確さを欠くように思われる。

時制について、関係節、主節とも完全過去形である。後者の foi＜ser が完全過去形であるのは、このポルトガル語訳が唯一である。他の言語はすべて現在形である。これはいかに理解すべきであろうか。一つの考え方として、ポルトガル語の完全過去は、スペイン語の不定過去と形態について語源的には同一であるにもかかわらず、本稿において名称を異にしている理由でもあるが、やはり用法が異なることを理由にあげることができよう。筆者の経験の範囲にすぎないが、スペイン語であれば現在形をとるはずの場合に、完全過去形を使用する例を、相当数見聞している。また、ブラジル人ではあるが母語話者自身、口語における現在形の使用頻度が低いことを認めている。もう一つ見方として、一種の強調構文であると考えることはできるであろうか。なぜなら、pelo poder de（の力によって）は意味を明確にする、すなわち強調のために加えた部分である。だが、このことが現在形を完全過去形にする積極的な根拠になるかが問題である。反証となり得る事例を挙げると、ポルトガル語の強調構文では… é que …が、特にブラジルでは強調の語感が希薄になるほど頻繁に用いられるが、過去の事柄を述べる場合であっても… é que …を…foi que…と時制を一致させなければならない必然性はないようである。他方、先述の o que が「子」であるのか「生まれたこと」なのかが、いま一つ筆者にははっきりしない。ポルトガル語訳の二つの完全過去のアスペクトに

ついて、明確な解決に至ることができなかったが、日本語新共同訳「子は･･･宿ったのである。」が示唆的である。さらに参照した版の中で、この第２０節で直接「子」と訳出している版は、他にスペイン語共同訳であることに注意したい。

第２１節では、未来時制の対応と所有関係の表現が主な検討対象である。

21 τέξεται δε υιόν, και καλέσεις το **ο**νομα **αυτου** Ιησουν**:** αυτος γαρ σώσει τον λαον **αυτου** απ**ο** των αμαρτιων *αυτων*.

単数属格（イエスの）*複数属格（人々の）*

Pariet autem filium, et vocabis nomen **eius** Iesum: ipse enim salvam faciet populum **suum** a peccatis *eorum*.

単数属格・所有形容詞（イエスの）*複数属格（人々の）*

Dará a luz un hijo y **le** pondrás por nombre Jesús, porque él salvará a **su** pueblo de *sus* pecados.

単数与格（イエスに）所有形容詞（イエスの）所有形容詞複数形（人々の）

María tendrá un hijo y tú **le** pondrás por nombre Jesús. Se llamará así porque salvará a **su** pueblo de *sus* pecados. (マリアは息子を持ち、お前は彼に名前としてイエスをつけよ。)

単数与格（イエスに）所有形容詞（イエスの）所有形容詞複数形（人々の）

Ela vai dar à luz um filho, e tu vais pôr-**lhe** o nome de Jesus (Salvador), pois ele salvará o **seu** povo dos pecados.”（･･･、そしてお前は彼にイエス（救世主）の名をつける、）

単数与格（イエスに）所有形容詞（イエスの）定冠詞男性複数形（それらの罪）

マリアは男の子を産む。**その子を**イエスと名付けなさい。この子は**自分の**民を*[民自らの]* 罪から救うからである。」

動詞の時制については、ポルトガル語訳を除いて、すべて本来の未来形で表現されている。ポルトガル語訳において、前半に迂言あるいは複合形 ir + inf. 2 箇所、pois 以下に本来の未来形と、２種類の未来形が見出される。前者が近未来で、後者が遠未来という使い分けの意識が働いているのであろうか。

語彙について、ここで古典語原典では明示されていないものの、初めてマリアが主語になり、「生む・産む」τέξεται **(tiktw)** が用いられる。なお、ギリシア語のυιόνには冠詞が伴っていない。「名付けなさい」の箇所は、古典語は二つの対格を支配する動詞καλέω; voco 「･･･を･･･と呼ぶ」で表現しているが、３対訳のスペイン語も含め近代語は、間接目的語に対し動詞poner; pôrがpor nombre Jesus; o nome de Jesusという表現を用いている。もっとも、西葡両言語とも動詞llamar; chamarによって古典語のように二つの直接目的語を使用した表現も可能なはずである。とこ

ろで、この箇所の２人称の未来形は、命令の用法であるとされる。参照した各言語のなかで、法時制に変化を付けているのはドイツ語訳である。すなわち、この箇所の助動詞はwerdenではなくsollenを使用している: Sie wird einen Sohn gebären, und du sollst ihm den Namen Jesus geben, denn er wird sein Volk von seinen Sünden erlösen.

所有関係を示す際に属格と所有形容詞のいずれを使用するかの問題を先に指摘した。第２１節は、各国語間で興味深い対照が見出される。まずギリシア語原典は、代名詞 **auto"**の単数主格（彼［イエス］自身は）が１回、単数属格（イエスの）が２回、複数属格（人々の）が１回現れる。複数形であるのは **o lao"**（人々：男性単数名詞）との意味の一致による。この主格は、**auto"**本来の用法である強意代名詞（「自身」）として機能しているであろうか。ギリシア語においては、指示の対象が２つあり数と格が異なる語形があらわれるものの同一種の代名詞で表現している。

一方、ラテン語は３種類の語を使い分けている。すなわち、eius, eorum (is の属格単・複形)；ipse（強意代名詞：男性主格形）；suum（［３人称の主語の］所有形容詞 suus 男性単数対格形）である。eorum はギリシア語と同様に、populus（人々：男性単数）の意味による一致である。問題は、ipse … populum suum の関係と西葡語における用法の変化である。suus は語形変化については本来の意味での形容詞的性質を有するが、所有者は主語が原則であり、その意味では、広義の再帰的機能を持っている。西葡語においては、この再帰的機能が、３人称や対話者へと拡張していく。

西葡訳に関して、共通の要素は、「与格（間接目的語）に名を付ける」という構文を用いている点である。すなわち、古典語の「彼の」: 属格の代わりに、「彼に」: 間接目的語（命名の対象者）で表現している。ラテン語の suus の用法が拡張された事例は、スペイン語２訳の sus pecados である。西葡２言語とも、主語 él; ele の人々su pueblo; seu povo までは、ラテン語の用法の範囲内、すなわち、主語の支配の範囲内である。ところが、スペイン語は、同一の所有形容詞 su によって、さらに「人々の」を示している。同一文中において、同一種の所有形容詞を使用した異なる所有者の並存が可能であるということである。ポルトガル語は、この箇所に定冠詞を使用している。スペイン語との用法の差異の原因として、曖昧さを避けるためということがまず考えられるが、この文における構文的条件に違いはないように思われる。一般に、ポルトガル語の本来の２人称使用の後退はスペイン語以上に進行し、代わりに本来３人称の範疇の語が使用される傾向がある。その結果、３人称の語の用法が過重になり多用途ゆえの不明確さをさけるために、スペイン語では忌避される所有関係については「de+人称代名詞」の表現が、特にブラジルの口語では多用されるようである。このことが、スペイン語とは反対に、同一文中、同一種所有形容詞、異なる所有者の並存を避ける一因になり得よう。もう一つ、所有形容詞を使用しない理由として、内容的に民の罪は具体的に存在するのであるから、定冠詞を付すことで十分であるとも考えられよう。

他方、ちなみに上掲のドイツ語訳では、当然のことながら、ロマンス系言語であるスペイン語・ポルトガル語とは語形変化の体系が異なる。ここでは紛らわしいが、sein Volk（中性単数４格：「イエスの」）；von seinen Sünden（女性複数３格：「人々の」所有者が女性あるいは複数の ihren ではない）となり、やはり所有者の文法性によって所有代名詞 sein か ihr を決定する。

以上、所有関係の表現形式は同一系統の言語においても様々な差異や変化が見られる。

第２２節では、古典語と近代語の時制の対比、動作主が主語であるか否かといった点が考察の対象になる。

22 Τουτο δε **ολον γέγονεν ινα πληρωθη** *το ρηθεν* υπο Κυρίου δια <u>του προφήτου λέγοντος</u>

（[23 節のように]語っている預言者を通じて主によって言われたことが）

現在完了＋目的節（接続法第１アオリスト受） *アオリスト受動分詞中性単数主格*

<u>現在分詞男性単数属格（預言者に一致）</u>

Hoc autem totum **factum est ut adimpleretur** *id quod dictum est* a domino per <u>Prophetam dicentem:</u>

完了受＋目的節（接続法未完了） *名詞節（目的節主語・完了受）* <u>現在分詞単数対格</u>

Todo esto **acaeció a fin de que se cumpliese** *lo que dijo el Señor* por <u>el profeta que dice:</u>

（[23 節のように]語る預言者を通じて主が言ったことが実現するために）

不定過去＋目的節（接続法未完了再帰se形） *名詞節（目的節主語・先行詞は目的格･不定過去）* <u>形容詞節（直説法現在）</u>

Todo esto sucedió para que se cumpliera lo que el Señor había dicho por medio del profeta:（主が預言者を通じて[既に]言っていたことが）

不定過去＋目的節（接続法未完了再帰ra形） *名詞節（目的節主語・先行詞は目的格･過去完了）*

Tudo isto **aconteceu para se cumprir** *o que o Senhor tinha dito* pelo profeta:

完全過去＋不定文（目的・再帰） *主語（名詞節・過去完了）*

このすべてのことが起こったのは、*主が*預言者を通して*言われていたことが*実現するためであった。

主文の動詞と時制に関して、すべてが自動詞であるとまず指摘できる。ギリシア語は、アオリスト**(egeneto)**ではなく現在完了である。ラテン語は、見かけは受動形であるが、他動詞 facio（なす；作る）の完了受動形を自動詞 fio の完了として使用したものである。西葡はすべて不定（完全）過去であり、現在完了にはして

いない。むしろギリシア語の現在完了が特殊な強調用法なのであろうか。次の目的節（ポルトガル語は不定詞句）は、接続法未完了が形態的に存在しないギリシア語を除いて、接続法未完了である。

次の「言われていたこと」の箇所で、「主」の構文上の位置で、古典語（受動の動作主）と西葡語（関係節の主語）の間に差異を見出すことができよう。さらに新共同訳が単に「言われたこと」ではなく「言われて**いた**こと」と過去完了の如く前時または先行的事柄として訳出していることに注目しよう。το ρηθε**n (erw** : 言う)のアオリスト自体に前時性が見出されるであろうか。他の言語はいずれも関係節であるが、３対訳のラテン語が完了、スペイン語が不定過去、西葡共同訳は過去完了を用いている。なお過去完了について、助動詞がスペイン語では haber、ポルトガル語では ter と複合時制の系統が異なっている。節の末尾に置かれている預言者に続く λέγοντος(<λέγων <λέγω：語る)が、現在分詞であり同時性や継続性を表すことと、西葡共同訳においては、冗長さを避けるためか、この現在分詞に対応する語は現れず、引用句を導くコロンに置き換わっている。３対訳スペイン語は、関係節で厳密な意味での時制の一致を離れて直説法現在形で訳している。同一文中において、アオリストは現在に対して、完結性という点から見れば先行あるいは前時と考えられる。以上、二つの分詞のアスペクトの差異が日本語を含む近代語訳に反映した例といえよう。

第２３節では、一般的な３人称が現れる。

23 Ιδου η παρθένος εν γαστρι **e**ξει και τέξεται υιόν, και *καλέσουσιν* το **o**νομα **αυτου** Εμμανουήλ, **o** εστιν μεθερμηνευόμενον Μεθ’ ημων ο Θεός.

男性単数属格：彼[男の子]の *一般的3人称複数* 関係節（現在中・受動分詞中性単数主格）

Ecce virgo in utero habebit et pariet filium, et *vocabunt* nomen **eius** Emmanuel, quod est interpretatum Nobiscum Deus.

男性単数属格：彼[男の子]の *一般的3人称複数* 関係節（完了受動）

He aquí que una virgen concebirá y parirá un hijo, y *llamarán* **su** nombre Emmanuel, que traducido quiere decir Dios con nosotros.

所有形容詞：彼[男の子]の *一般的3人称複数* 関係節（関係代名詞・過去分詞主格）

(訳された［インマヌエル］は「神は我らと共に」と言わんとする。)

La virgen quedará encinta, y tendrá un hijo **al que** pondrán por nombre Emanuel. (que significa: “Dios con nosotros”).

先行詞（間接目的格）・関係節 *一般的3人称複数* 関係節

A virgem ficará grávida e dará à luz um filho **que** se há-de chamar Emanuel. Emanuel quer dizer: “Deus está connosco”.

（インマヌエルと呼ばれる[べき]男の子を･･･。インマヌエルは「神は我々と共におられる」という意味である。）

先行詞（主格）・**関係節**（*三人称単数再帰*＋補語: Emanuel）直説法現在

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。**その**名はインマヌエル*と呼ばれる*。この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

すべて動詞は未来あるいは未来･必然相当形である。「見よ」は、西葡共同訳では訳出されていない。また、「身ごもって」の部分が、西葡共同訳では、単独の動詞によらず、形容詞 encinta; grávida によって、さらに単に状態を示す estar ではなく、結果としての状態を表す動詞 quedar; ficar の未来形とともに表現されていることも特徴として指摘できよう。

主語を特定しない一般的３人称 καλέσουσιν (καλέω：と呼ぶ)は、新共同訳で「呼ばれる」と受動に訳されている。ポルトガル語のみが、先行詞 um filho の関係節において冗語的語法 haver de inf.に再帰代名詞を伴い受動表現にしている。ここで今一度、所有関係の表現を検討してみよう。２古典語はいずれも代名詞属格形を用いている。ラテン語は、主語が所有者でないことから、所有形容詞は用いなかったと考えられる。3 対訳スペイン語は二重の目的語を取る llamar と所有形容詞、共同訳スペイン語は間接目的格の先行詞、ポルトガル語は「名」は訳出されず受動表現 se chamar に代わっている。

新共同訳「という意味である」は、西葡訳の方がより近く感じられる。２古典語は、関係節と訳語「我々と共に神は（おられる）」を同格にして表現している。分詞が名詞化ではなく、繋辞 **estin**; est に続いて使用されている点が興味深い。３対訳スペイン語は、この点、冗長な表現をあえてとっているとも言えよう。

第２４節は、主語を修飾する主格の分詞構文と副詞節の対応を主に検討する。

24 **εγερθεις δε ο Ιωσηφ απο του υπνου** εποίησεν ως *προσέταξεν αυτw* ο **a**γγελος Κυρίου, και παρέλαβεν την γυναικα αυτου**:**

（**夢から目覚めたヨセフは、･･･** そして[ヨセフは]彼の妻を迎えた）

アオリスト受動分詞男単主 *アオリスト*

Exsurgens autem Ioseph a somno, fecit sicut *praecepit ei* angelus Domini, et accepit coniugem suam.

（**夢から目覚めているヨセフは、･･･** そして自分の妻を迎えた）

現在分詞単数主格 *完了*

Despertado José del sueño, hizo como *le ordenó* el ángel del Señor, y recibió *consigo* a *su* mujer;

（**ヨセフは夢から目覚めると、･･･** そして自分の妻を迎えた）

過去分詞構文（主文の主語と同一） *不定過去*

Cuando José despertó, hizo lo que el ángel del Señor *le había ordenado*,

y tomó a María por esposa.
（主の天使が彼[ヨセフ]に命じていたことを行い、そしてマリアを妻として迎えた。）
副詞節（時・不定過去）　　*過去完了*
Quando José acordou, fez como o anjo *lhe tinha mandado*: recebeu Maria por esposa
副詞節（時・完全過去）　　*過去完了*

ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が*命じたとおり*、妻を迎え入れ、

３対訳が分詞構文であるのに対し、西葡共同訳は時の副詞節に訳出している。３対訳の分詞構文は、それぞれ時制およびアスペクトについて、特徴が見出される。ギリシア語原典は、他動詞 **egeirw**（起こす・目覚めさせる）を受動形にすることにより自動詞化したアオリストである。主文の動詞もアオリストである。ラテン語が意外にも、自動詞 exsurgo（立ち上がる；復活する）の現在分詞である。通常の動作を表す動詞ではなく、ここでは状態を表すのであろうか。次のスペイン語のように、過去分詞形 exsurrectus である方が理解しやすい。スペイン語は、他動詞 despertar（起こす・目覚めさせる）の過去分詞である。同一テキストの対訳でありながら使用する分詞の性質は異なる。私訳で差を訳出しようと試みたが、筆者の能力を超える。

動詞の時制は、３対訳は、アオリスト―完了―不定過去の対応である。一方、西葡共同訳では、天使の指示の部分を過去完了形にしアスペクトに陰影を与えている。

所有関係について、ラテン語は、ヨセフが主語であることから、所有形容詞を使用している。このラテン語の suam の再帰的性質は、３対訳スペイン語の consigo に訳出されている。

第２５節は、古典語における一定時点まで持続する否定表現と西葡語訳との対応が検討される。

25 και **ουκ εγίνωσκεν αυτην e***ως ου* **e***τεκεν υιον***:** και εκάλεσεν το **o**νομα αυτου Ιησουν.
（彼女を知らないでいた。）
未完了　　*前置詞＋関係代名詞中性属格・直アオリスト*
Et **non cognoscebat eam** *donec peperit filium:* et vocavit nomen eius Iesum.
（[ヨセフは］彼［子］の名をイエスと呼んだ。）
直未完了　　*接続詞・直完了*
la cual, **sin que él antes la conociese,** *dio a luz un hijo,* y él puso por

nombre Jesús.
（彼女は、**彼が前に彼女を知ることなく**、*男の子を生んだ*、そして彼は名としてイエスを付けた。）
接続詞・接続法未完了過去 se 形　*不定過去*

Pero **no hicieron vida conyugal** *hasta que ella dio a luz a su hijo,* al que José puso por nombre Jesús.
（**彼らは夫婦生活をしなかった**、*彼女が自分の子を産むまでは。*）
不定過去　　*接続詞・直不定過去*

([José] receberu Maria por esposa) 25 e, **sem ter relações conjugais com ela,** *Maria deu à luz o menino,* a quem José pôs o nome de Jesus.
（**[ヨセフが] 彼女と夫婦の関係を持つことなく**、*マリアは男の子を生んで*、彼（その子）にヨセフはイエスの名を付けた。）　**前置詞･不定詞句**
完全過去

*男の子が生まれるまで*マリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

まず３対訳における２古典語とスペイン語を比較してみよう。２古典語が未完了時制をとる「知らないでいた」を主文としているのに対し、スペイン語の対応箇所は、それに続く不定過去の「男の子を生んだ」を中心とする関係代名詞 la cual（マリア）に導かれる関係節である。古典語の主文は、副次的あるいは従属的な節である sin que +接続法未完了過去（･･･することなしに）に転換されている。対訳としては、大きな変化である。

一方、西葡共同訳もそれぞれに特徴が見られる。スペイン語は、構文として到達点や期限の接続詞を使用する点では古典語に対応するといえるが、主文の主語は３人称複数であり、動詞の時制はどちらも直説法不定過去である。主文の動詞が未完了をとるのは不可能であろうか。この点では、こちらも訳出の際、かなり大きな転換が行われたともいえる。ポルトガル語は、前置詞 sem を使用する点で３対訳スペイン語と共通するところもあるといえるが､sem の前置詞句はヨセフが主語の文の支配にある。また、古典語において追加の接続詞 **kai**; et で導入される「名付けた」の部分を関係節にしていることからも、やはり独自に構文の整理を行ったといえる。

結語にかえて

結果的に、多くは本来のアスペクトとは距離のあるテーマで考察を行うことになった。しかしながら、福音書の一節のように、原典がほぼ一つに特定できるテキストが多用な言語に様々な形で翻訳され、各版が原典の如何なる要素を伝えることに留意したかを母語話者でない立場から検証することも、対照研究としては

あまりに旧弊かもしれないが、何らかの意味が未だにあるのではないだろうか。聖典であるばかりでなく、あまりにも有名なマタイ福音書の第一章を、筆者のように浅学菲才な者があれこれいじり回すのは、これまさに不遜の極みであろう。他方で、筆者なりに色々発見もあり、楽しい作業であったことも事実である。いささか場違いな研究であるにもかかわらず、ギリシア語フォントの購入をはじめ様々な面でご支援いただいたプロジェクト座長柳沢教授をはじめ、参加者各位に深甚の謝意を記して、本稿を終える。